

1 次答申（基本構想）の構成 たたき台（論点整理）

【前文】

【計画全般】

1 未来を生きる子ども・若者の関与

- 計画策定・推進プロセスにおける今後の小田原を担う子ども・若者の声を聴く取組や仕組み
- 子どもたちの可能性を広げる関わりやすい工夫

2 計画の推進・評価・KPI

- 将来の道筋を示し、走りながら取組を進める（都度見直しを図る）総合計画のあり方
- 計画と取組のタイムラグを埋める推進エンジンのあり方・体制
- KPI 設定（目標値の柔軟な軌道修正、指標の階層構造、SDGs の視点）と横断的・連動性を持った評価

3 計画の分かりやすさ

- 計画の色、切り口として市民がイメージしやすいものを示し、市民への浸透を図る
- 何をもって「世界が憧れるまち“小田原”」に向かうのかの議論が必要
- 抽象的かつ他地域でも成立する基本構想の打破（小田原市ならではの発信、実行計画の内容）

4 SDGs の視点

- SDGs の考え方（経済・社会・環境）に沿った施策展開、計画体系の見せ方の工夫

5 地域コミュニティ（市民力・地域力）

- これまでの地域コミュニティ（市民力・地域力）の位置づけと整理

【基本構想】

1 まちづくりの理念と 2030 年に目指すまちの姿

- 人口 20 万人規模の根拠の明示（小田原市を中核とする広域連合の形成）
- 「世界が憧れるまち“小田原”」のターゲットとアプローチの整理（行ってみたい・住んでみたい）

2 まちづくりの目標

- 3つの目標における KPI 設定（生活：住み続けたい意識、経済：産業の漏洩額減少、環境：P、目標間の相乗り）

（1）生活の質の向上

- 子育てする親の立場の記述⇒子どもの立場からの視点が必要
- 未病コンセプトの位置づけ
- 地域の移動手段のデジタル化による利便性向上（考え方の整理）

（2）地域経済の好循環

- コロナ禍で働き方が変化する状況を捉えた、起業（老若男女のサポート体制、ローカルベンチャー等）促進、在宅ワーク時代の小田原のまちづくりの打ち出し
- 働く場と雇用の創出×若い世代の転入増（考え方の整理）
- 地域経済におけるデジタルトランスフォーメーション
- 地域経済における環境問題やエネルギー関連の取組の位置づけ

（3）豊かな環境の継承

- 森里川海ひとつらなりの特徴を生かした表記

- 地域経済における環境問題やエネルギー関連の取組の位置づけ【再掲】

3 まちづくりの推進エンジン

- 市民意識調査の結果を踏まえた表記（若者女性活躍、行政経営、デジタル）

(1) 行政経営

- 経営資源としての「情報」の表記
- 県西地域における広域連携の位置づけ

(2) 公民連携・若者女性活躍

- 若者女性という言葉を持に出していくのがよいか、年齢性別に限らずみんながチャレンジできることをメインに出すべきか（両論併記）

《事務局の考え》

- ・ 推進エンジン（2）公民連携・若者女性活躍では、「これまで培ってきた市民との協働の仕組みを前提としつつ、柔軟な発想やアイデアを持つ若者・女性の活躍と、…民間事業者との連携により」イノベーションや課題解決の手法を見出すとし、「年齢、性別に関わらずチャレンジし、活躍できるまち」を目指すこととしている。
- ・ 基本的には、年齢、性別に関わらず、それぞれの選択でチャレンジし活躍できるまちが前提としてあり、これまでの市民の力・地域の力を進化させていくためにも、第6次総合計画においては、活躍したい人が活躍できていない現状も捉え、若者・女性の活躍できる環境づくりを進めていく考え。
- ・ 関連で、人それぞれの価値観のなかでライフスタイルを選択していく考えについては、1まちづくりの理念と2030年に目指すまちの姿で、「住み慣れた地域で自分らしく暮らしていけるよう…」と記載している。

(3) デジタルまちづくり

- デジタルまちづくりの趣旨（データにより市民の課題や希望を理解しているまちになること）の表記
- データ連携基盤の整備、地域ネットワークや必要なデバイス普及などのインフラ整備（投資含む）の表記

※ 次頁以降、これまでの総合計画審議会が出された意見を項目ごとに整理

【計画全般】

1 未来を生きる子ども・若者の関与

- 今後の小田原を担うことを考えると、小学生やより若年層の意見も聴いていただく、もしくは小田原をどうしていきたいのか子ども達の意見をぜひ聞く場があれば良い。
- 子どもの声を聞く取組は、アリバイづくりで終わらせないでほしい。ぜひ、ちゃんと聴いてあげてもらえるような仕組みを作った方がいい。
- 計画をこれから動かしていくプロセスの中にも、子どもたちに随時参加してもらって検討を。
- 絵等の募集について、2030年の小田原の姿は、子供たちにとって抽象的で漠然としているので、もう少し分かりやすいテーマを設定するとか、イメージをしやすい工夫が必要ではないか。
- 絵等の募集がイラストだけだと、絵が得意な子や絵に興味がある子どもだけに絞られてしまうのではないか。イラストだけでなく、得意な事って、子どもたち一人一人あると思うので、歌や俳句、文章でもいいという形で広く募集した方が、子どもたちの可能性も広がるし、もう少しテーマを絞ることで、子どもたちの力を引き出せるのではないか。

2 計画の推進・評価・KPI

- 総合計画は、まち・ひと・しごと創生総合戦略のように、5年後の大きな道筋はある程度示し、やっていく中身に関してはできるだけ都度見直ししながら、その際に子どもも含めて様々なご意見を聴いて一緒にやってく体制をつくっていく。今回、完成形を目指すということだけでなく、走りながら良いものをつくっていく総合計画でも、これからの時代ふさわしいのではないか。
- 計画と具体的なプロジェクトとの間にタイムラグというのか、計画つくって推進は別というのか、例えば計画の中にも推進のプロジェクトのスケジュールを書いてしまうのか、新たな文章をつくって、「はい、スタート」ではなくて、計画づくりと同時に推進をすることが必要ではないか。
- 自治体としては単年度予算なのですぐというのは大変かもしれないが、そこでこそ推進エンジンが、どういう位置づけになるかが非常に重要。従来型の発想の推進の仕方だと、タイムラグがあっても仕方がないが、そうではない推進エンジンは何かを考えていかないといけない。
- KPI(目標値)として立てた数字があっさり達成できた、一方でどう考えてもできないというケースなどもある。ローリングをしないと3年計画自体は毎年変えないが、KPIはいじっても良いと思う。ABCで評価をした中でBがついたCがついた、だから次頑張るでも良いが、明らかに達成できない目標や反対にできてしまう目標は、気を付けて立ててもなってしまうんです。社会の、今回のコロナはまさにそうだが、そういう時に目標値を柔軟に軌道修正するという事も考えられる。
- 施策ごとの大きな指標とその下にぶら下がる小さな指標という形で、指標の間にも、ある種、階層構造を作っていないとなかなか全体像が見えにくくて、個別な議論に話が集中することも懸念されるので、指標の階層構造をしっかり作っていくことも念頭に置いてほしい。
- 指標を作る時に、SDGsの視点をぜひ使ってほしい。
- 評価そのものを横断的に、連動性を持って循環をさせて評価していく。例えば、貧困は貧困だけではなくて、教育の問題と働き方改革を合わせて評価をしない限り貧困を抜け出せない、という社会的な大きい戦略の捉え方が必要になるので、そういうものが分かりやすくなるような、政策としての評価の考え方を議論できるといい。

- 基準値を評価に活用しているということだが、基準値はどういう性格を持ったものなのか。
- KPI をどのように設定していくのか。役所の中で指標を決定していくのか、それとも外部の方の意見を入れて指標を決定していくのか。

3 計画の分かりやすさ

- 今回の計画の色というか、切り口というか、市民の皆さんがイメージしやすいものをうまく示す必要がある。そこがもう少しできると良い。
- 公民連携、デジタルに力を入れているので、ここをもう少し分かりやすく示すとか、市民の皆さんからしたときに、今度の計画ってあれだよなというイメージがしやすいものをゴールと計画の間にうまくつくと市民の浸透は図れるのではないか。
- 推進エンジンそのものを言葉にするというよりは、これはあくまでも手段なので、「世界が憧れるまち小田原」に向けたもう一言、何をもちょうこに向かうのかという点を、この会議の中で絞り込んで考えていくのはどうか。
- 基本構想を全て確認したが、抽象的であり、仮に他の地域にこの基本構想を当てはめたとしても成立するような内容になっている。小田原市ならではの発信をしなければ世界から憧れられる地域にならない。ただ、基本構想なので、今後議論になる実行計画が、本当に小田原が世界から憧れるまちになるための施策になっているかが非常に重要になる。

4 SDGs の視点

- 小田原市は「SDGs 未来都市」に選定されており、SDGs の特徴である「経済」（地域経済の好循環）、「社会」（生活の質の向上）、「環境」（豊かな環境の継承）で区分し（順不同）、これらに統合的に取り組むという SDGs の考え方に沿って行政施策を展開することを明確にすることが未来都市としての姿勢を示すことにつながるのではないか。
- 行政案では、全体的に未来に向けて責任を果たす SDGs の考え方を読み取れるところが少ない。SDGs をどのように計画に反映したのか、マトリックスの星取表を資料としてつけるような従来型の取組の示し方ではなく、2030 年を見据えている計画にふさわしく、SDGs の考え方をもとに計画の体系を見せていくような工夫が必要。
- 指標を作る時に、SDGs の視点をぜひ使ってほしい。【再掲】

5 地域コミュニティ（市民力・地域力）

- 公民連携やデジタルまちづくりは、これから市長が進めていきたいことで、赤で枠取りをしてある。市民の力、地域力の方で、前回の広報委員長会議でも質問したが、地域別計画を今回のこの第6次総合計画の中に入れてもらえるのかどうか。
- 地域コミュニティと自治会連合が分かりにくい点。これまで、地域コミュニティ、自治会連合、スクールコミュニティ、コミュニティスクール、この4つの言葉をずっと使い続けてきて、たぶん小田原市民ですら、その区別が分かっていない状況のまま今までずっと来ている。計画を立てる時には、きちんと分かりやすいように整理すべき。また、組織ごとのメンバーが大体同じという、それでいくつも同じ会議に出なければいけないことが起きていて、この点も整理していかないといけない。今後担い手もいなくなっていくと思うので。

【基本構想】

- 基本構想を全て確認したが、抽象的であり、仮に他の地域にこの基本構想を当てはめたとしても成立するような内容になっている。小田原市ならではの発信をしなければ世界から憧れられる地域にならない。ただ、基本構想なので、今後議論になる実行計画が、本当に小田原が世界から憧れるまちになるための施策になっているかが非常に重要になる。【再掲】
- 基本構想中、「魅力的」・「魅力」という文字が色々なところに記載されてるが、もう少し具体的に記載するか、言葉を変更してはどうか。(全てではないが)
例1：P14 1 まちづくりの理念と2030年に目指すまちの姿 下から3行目
小田原の魅力を最大限に⇒小田原市内の地域毎に合った特長を最大限に
例2：P15 (2) 地域経済の好循環 1行目途中
働く場としての魅力を高め⇒働く場としての質を高め

1 まちづくりの理念と2030年に目指すまちの姿

- 「人口20万人規模」という記載について、根拠を明示した方が良い。必要な都市機能を自力で整備し一定の経済循環を実現するためには、50万人程度の規模が必要であり、小田原市を20万人規模とする場合には小田原市を中核とする広域連合の形成が不可欠。
- 国内外の人たちが、行ってみたい、住んでみたいと憧れ、そして住む人に住み続けたいと思ってもらえる「世界が憧れるまち“小田原”」とあるが、「行く」と「住む」はターゲットやアプローチが全く違ってくると思う。どちらが重点的か？
- 「世界が憧れるまち“小田原”」になるには、外からの目線が必要。例えば神奈川県内の別地域の住民が小田原に対してどう思っているかなど、調査をした実績やデータはあるか？

2 まちづくりの目標

- まちづくりの3目標にKPIを設定したい。
生活の質の向上については、理念が「世界が憧れるまち」であり、その具体的な内容が「行ってみたい、住んでみたい、住み続けたい」なので、市民意識調査における「ずっと住み続けたい」意識の比率に設定してはどうか。できれば、2030年の姿も、市民意識調査における「住み続けたい」理由を伸ばし、「住み続けたくない」理由を減らす方向で組み立てると、異論が少なくなるのではないかと。「住み続けたい」理由の決定要因を掘り下げると、60歳を境にした年齢差が最も大きく、愛着の有無や行政経営への批判意識なども作用していることがわかった。これらの分析も、施策の組み立てに生かせないか。
地域経済循環のKPIは、RESAS上の域内経済循環率は100%を超えていることから工夫が必要。一案としては、産業分野ごとに区切り、飲食、宿泊、食料品、石油石炭、専門技術、情報通信など重点施策にかかわる産業の漏洩額減少を謳ってもよいのではないかと。
環境のKPIは難しいが引き続き考えたい。
- まちづくりの3目標については、目標間の相乗りとあるとよいのではないかと。
たとえば地域経済の好循環も、企業や観光客・関係人口誘致にとどまらず、上記の「住み続けたい」理由を伸ばし「住み続けたくない」理由を減らすことに資する、つまり小田原の価値を共創する起業支援を柱の1つに押し出してはどうか。そうすると、「住み続けたい理由」の第1

は「自然の豊かさ」なので、豊かな環境の継承に資する(エネルギーの生産・流通も含め)起業支援も押し出せることになる。他にも、「娯楽や余暇」を提供する起業、「便利だが不便な交通」のジレンマを解消する新たな交通に関する起業など、重点化・焦点化できるのではないかと。起業支援も賛成だが、戦略的な絞り込みが必要だと考える。

(1) 生活の質の向上

- 暮らし(生活の質の向上)が目指す姿では「子育て」に焦点があてられており、枠組みが明確でないように感じる。
- 14 ページ最後の行で「子育てに夢や希望が持てるまちを目指します」とあり、2030年の姿の2つ目の項目にも「子育てに夢や希望が持てるまち」という表現がある。これは、「夢や希望を持って子育てができるまち」のがよいのではないかと。それと同時に、ここで書いてあることは子育てをする親の立場に立っての記述、大人の立場に立っての記述となっており、むしろ子どもたち自身が夢や希望を持って育つことができる、そういう環境を整えていくということが重要。子どもの声にしっかりと耳を傾ける、子どもの声をしっかりと聞くという、子どもをその子として尊重するというそういう姿勢が、ここで表現される必要があるのではないかと。子どもの立場からの視点で1つ記述を加えてほしい。
- 「おだわら TRY プラン」後期基本計画では、未病に関して「4いのちを育て・守り・支える」に位置付けられていたが、今回の行政案ではその考え方がなくなっている。県の重点施策であり、国の健康医療戦略にも位置付けられている未病コンセプトについて、引き続き盛り込んでいただき、県、国とともに取組を進めていただきたい。
- 「公共交通をはじめ地域の移動手段の維持確保とデジタル化による利便性の向上により誰もが気軽に家の外に出ている環境が整備されている」と書いてあるが、デジタル化による利便性の向上によって、わざわざ家から出なくても、いろいろな情報を得たり用が足せたり、このように会議もできたり、人々と交流もできる環境が今急速に整ってきており、家の外に出ている環境だけではなく、その逆もある、デジタル化による利点をもう少し分けて書いた方がよい。
- 15 ページの2030年の姿5ポツ目について、「デジタル化が進めば、外に出る必要はない」との意見があったが、デジタル化が進んでも人間、生活していく上で、他人から見て無駄なような外出も心身の上で必要。特に高齢者にとっては移動手段の維持・確保は大切。外に出て五感を働かせる生活こそその人の人生に色がつく。肉体的にも精神的にもプラスになる。行政案の状態を活かしてほしい。

(2) 地域経済の好循環

- 「起業の促進」、「起業家意識の醸成」といった観点を打ち出したほうが良いのではないかと。文中にある「産業の創出」とは趣旨が異なる。
- P15 下から3行目「働き方(テレワーク・ワーケーション)が定着し、多様なワーク・ライフ・バランスが実現されている。」⇒多様なの前に「併せてサービスの提供により」を追加。理由としては、働き方でのテレワークは今後どこでも普及してくるので、小田原独自の付加価値をつける事で、人は集まり、利用したくなると思う。仕事の効率が良ければ、早く仕事が終

わり、普段より早く終わった時間を小田原市内観光やイベントへの参加で良さをアピールできるのではないかと。

- 産業創生（誘致を含む）のためには投資をする人たちへの働きかけが不可欠。起業について金融機関との連携を考えている（「施策 12 働く場・働き方」）ことは理解しているが、金融機関の中にベンチャーキャピタルが含まれることがわかるようにしてはどうか。また、ベンチャーキャピタルも複数の累計があるが、シード投資をリード投資家として行っているベンチャーキャピタルとその投資先を地の利の良い小田原市に呼び込む政策が重要だと考える。
- P15 下から 5 行目に「新規事業にチャレンジしやすい環境が整い」という記述があるが、基本構想に書き込むかどうかは別にして「新規事業にチャレンジしやすい環境」とはどのようなものであるかを明確にしておく必要がある。
- まちづくりの推進エンジンでは、市民の利便性を高めるための DX についての言及があるのみ。市民の健康や交通サービスのデジタル化についても言及されていますけど、地域経済のセクションでも、地域の企業や環境に対するデジタルトランスフォーメーションのサポートを含める、あるいは言及すべき。
- 地域経済の好循環はとても重要な部分。3つの視点を加えて書いてほしい。
1つ目は、SDGs、地方創生もあるが、これからは内発的な地域内での小さなビジネスをつくるのがとても重要。ローカルベンチャーという言い方も出てきているが、いろんな条件が整ったら企業を誘致する、こっちに来てくださいという誘致型から、地域で地域の方々がそれぞれのできる範囲のビジネスを起こしていく、その視点を加えてほしい。
2つ目は、用語的に「工場」や「サテライトオフィス」、「誘致」はちょっと古い。サテライトオフィスも 20 年前の用語で、例えば「ソーシャルビジネス」、「リビングラボ」など新しい概念のものを。企業誘致という概念も重要ですが、違うような言葉でカテゴリー、概念をつくり直してほしい。
3つ目が、今一番重要なのは、SDGs を踏まえた環境問題とエネルギーの問題。課題があるからこそ新しい産業に結びつく。これは農業、水、食料にも関わり、大きい産業になる可能性がある。それと都市交通もこれから EV を含めて、自動運転で運転免許もいらなくなる時代がすぐそこに来ていて、自動車も空を飛ぶなど、2030 年までだとすると、ちょっと夢がないと思う。産業面では大胆に。そして若い方にも夢の持てるような産業構造をつくっていくメッセージを伝えてほしい。
- 雇用の増加でそのまま若い世代の転入が増えるかという問題。近隣の町に結構小田原市からでて人口が減っていくのは、小田原市で何か課題があるからで、近隣の方が家賃も安いし土地も安い、福祉サービスや防災面で安心できるかが住みたい理由に関係があるし、子育て環境などがきめ細かくあれば良い。10 年後、子どもは極端に減るので、子育て環境は財政的にはやりやすくなる。そのために企業を誘致して税収が増えればそこに回る。
- 景気に影響がない企業誘致を市長がトップセールスをして、課題に対しての財政支援をしていく。人口増加させ 20 万人にするのが目標なので、それが必要になる。
- コロナ禍において一番変わったのは働き方改革。2011 年大震災の時にエネルギーのあり方が変わったのと同じように。小田原はものすごく良い位置にあって、在宅ワークが当たり前の時代に小田原のまちづくりはどうしていくかということを考える。

- 起業、個人で企業をつくる人がこれから非常に多くなるなかで、起業をメインにしたほうが良い。女性、定年後の高齢者の起業もサポートしていく。老若男女関係なく活性化することを目標にすべきで、老若男女関係なく起業する人をサポートする。働き方が変わるなかで、まちがどう変わっていくかという方向で考えたほうが良い。
- 地域循環共生圏について、文中にエネルギーもあるが緑や自然に入っているが、産業や金融が全部入ってる。地域循環共生圏を自然に押し込めるのはどうか、エネルギーも産業です。それをどう循環させてまちづくりに資していくかの書き方は難しだが、より総合的なものになるのでは。
- 働く場と雇用が生み出されると、若い世代を中心に転入者が増えている姿が描かれているが、テレワークや働き方の多様化が進むなかで、働くことだけが転入の意味にならない時代が来る。働くところが小田原市にあるから住む場所として小田原市を選ぶことが、現実的でなくなるのではないか。仕事とか雇用とか、+αで小田原市に住む意味が必要になるが、それが多分まちづくりの目標の生活の質の向上になるので、少し多角的な視点で見られると良い。

(3) 豊かな環境の継承

- 「多様な森林空間が利用され」とあるが、森林空間も当然重要だが、小田原市は森、里、川、海が「ひとつつらなり」というところが重要な特徴としてあるので、「多様性に富む自然空間」といった表現の方が良いのではないか。
- 3つ目が、今一番重要なのは、SDGsを踏まえた環境問題とエネルギーの問題。課題があるからこそ新しい産業に結びつく。これは農業、水、食料にも関わり、大きい産業になる可能性がある。【再掲】
- 地域循環共生圏について、文中にエネルギーもあるが緑や自然に入っているが、産業や金融が全部入ってる。地域循環共生圏を自然に押し込めるのはどうか、エネルギーも産業です。それをどう循環させてまちづくりに資していくかの書き方は難しだが、より総合的なものになるのでは。【再掲】

3 まちづくりの推進エンジン

- 3つの推進エンジンについても、すでに行政案でピックアップされているように市民意識調査の結果も踏まえた書きぶりになると異論が少ないのではないか。若者や女性についても、立場によって活躍感が異なることは12ページに記載されており、その点を再確認すればよい。行政経営やデジタル化についても同様。

(1) 行政経営

- 「経営資源（人・モノ・金）」との記述があるが、「情報」も経営資源に含めた方が良いのではないか。
- 「おだわら TRY プラン」後期基本計画では、重点テーマの1つに位置付けられていた「9基礎自治体としてのあり方の見極め」（広域連携に係る記載）が、3つのエンジンの取組の小項目の1つになっている。小田原市は県西地域の核であり、地域全体の未来を描くリーダーの立場にあると思われるので、県西地域における広域連携についてももう少し重み付けをする必要がある。

(2) 公民連携・若者女性活躍

- 2030年に女性が活躍してるイメージやビジョンは決まってるか。女性の活躍といっても広義で、それこそキャリアの人、家を守る人、ただ稼ぎたい人などいろいろいる。
- 女性としてどういう立場、どういう方にフォーカスするのかという議論もあったが、若者と女性だけが活躍すればいいというわけではない。(2)の文章の最後に「年齢、性別に関わらず(誰もが)チャレンジし、活躍できるまち」、それが将来目指している姿なので、若者と女性だけになぜフォーカスするのか、そうすると若者と女性以外がむしろ排除されているかのような印象も与えてしまう。非常に奇異に感じているところ。
- もう少し、「市民活躍」という言葉がいいのか分からないが、年齢や性別に関わらず、誰もが柔軟な発想を持ってチャレンジする、意欲がある方がチャレンジできる、そういうまちにしていくんだという意欲が伝わるような表現にしてほしい。
- 若者と女性の活躍に関して、今回の市民意識調査でも活躍しているかどうかという実感を聞いている。若者に関しては若者が、女性に関してはお仕事をされていない女性や、非正規の女性が特にその活躍感を感じていないデータがある。政策を論理的に展開していくと同時に、ターゲットはこうなんだとおさえていくやり方ができるだけだけのデータもある。
- 若者女性という言葉の特に出していくのが良いのか、それとも年齢性別みんながチャレンジできるということをメインに出すべきかという意見がある。
- 女性活躍という言葉に違和感がある。会社のメンバー、ママ友さん、いろんな人と話すと、女性が求めているものは活躍というところではなく、ライフスタイルを選択しやすいかどうかだと思う。働きたいのに時間の融通が利かないから働けない、保育園に預けられない、働きたくなくて主婦やってるから満足ですとか。漠然と活躍と言うと違和感が出るのは皆さんわかっていて、ライフスタイルを選択しやすいまちとか、分かりやすく各々を尊重しますという方が良いのではないか。
- 女性だけではなく若者も同じで、チャレンジや活躍できると言う重荷に感じてしまう。男性、女性、若者、子ども、誰でも同じで、その人が置かれた場所、自分の価値観の中で考えれば良いことで、誰かに決められて活躍してる、活躍してないということではない。誰もが自分の価値観に沿って生きやすい、そんなに頑張らなくても良い、優しいまちになってもらいたい。ガンガン行きたい人は行けば良いし、そうじゃない人は引いても良い。そういうことが認められる、全体的にそうものが通じるようになってほしい。
- 活躍したい人が活躍できていないことが問われている。それから、漠然とした質問ではあるが、職業、性別、年齢によって回答差が出ているのも事実で、うまく活躍出来ていない実感ある方たちに手を差し伸べていくことが必要。これは、全女性、全男性、全若者に向けての話ではなく、今そういう気持ちを持ってないでいる皆さんを下支えしていく、これは決して間違っていないことだと考える。
- 学生の活動団体に所属してる時点で活躍したい思いがあるメンバーが集まっている。そこでは、小田原で活躍するためにサポートが欲しいという話はよく出る。若者の活躍という言葉で、後ろから支えて頂くのは必要に感じている。ただ、実際に活動をしているメンバー以外の同級生は、受験や別な面に追われており、そういった人たちに向けて活動ががんばれとか言う

のは違う。ただ、若者からは期待をしてもらった方が良く、支えてもらった方が良くという人が多いと思う。

- 若者女性について、アクションとしては賛成。一方で、超高齢社会、人生 100 歳時代に高齢者と言いますか、そうした人の担い手としての位置づけとして書き込む必要はあるのではないかと。そこは文章の問題。

(3) デジタルまちづくり

- デジタルまちづくりは、データによって世界で一番市民の課題や希望を理解しているまちになるということなので、個人情報保護について触れる際に合わせてその趣旨を含めるのはどうか。また、行政基盤の DX 化だけではなく民間の持っているデータとの連携も必要となるので、データ連携基盤の整備についても触れた方が良く。
- デジタル化を進めるためには、地域のネットワーク整備や必要なデバイスの普及などのインフラ整備、環境整備が不可欠なので、そこに投資が必要となる点についても触れた方が良く。